## 5 イラク

# 「伝統」と「おしゃれ」と「イエ社会」

酒井啓子

### 華やかなバグダード娘たち

一九八七年頃だったと思うが、私がバグダードに滞在している時、沢田研二がテレビのレポーターで取材に来たことがある。その時彼が街中を歩いて言うには、「イラク女性のファッションは僕のステージ衣装より派手ですねえ」。

イスラム教国といえば、女性の服装は体全体を覆う黒いアバヤ（イランでチャドルと言われるもの）か頭から首筋にかけてを覆う黒なり白なりのベールが通常のスタイルである、と思われることが多いが、バグダードを見る限りではその印象は一変する。女性、特に若い女性が色あざやかな、ラメを散らした西欧式のファッションで街中を闊歩し、ホテルやスポーツクラブのプールではハイレグの水着姿にもお目にかかることができる。化粧も念入りだし、物資不足で卵がない、チーズが高いといいながら、ヘアーダイ効果のあるシャンプーをはるばる海外から買い求めては、

チャドルと違って簡単な袖がついていて，片手で襟元を合わせる。髪はきちんと覆うこと。右側のようないい加減な羽織り方もよく見かける。

豊かな黒髪を金色に染めたりする。

そもそも女性が一人で街を歩いたり、結婚前に男性と二人で連れだって歩くことがタブーとされている伝統的イスラム社会からすれば、まずバグダードの女性たちの行動パターンは極めて西欧化されたものといわざるをえない。

## 「伝　統」と「おしゃれ」の折衷

もちろん、「躾」が厳しい家では女性の一人歩きを許さないばかりでなく、外出の際のアバヤの着用を娘に義務づけているところも多い。大学街のカフェテリアで婚約中の娘が派手なミニのワンピースを来てフィアンセと談笑しているのを横目で見ながら、アバヤに身を包んだ女性の一団がおどおどと紅茶をすすっていたりするし、金曜礼拝に母親

に無理やりつれてこられたであろう娘のアバヤの下に、うっすらと口紅がのぞいていたりもする。職場への往復には、まだまだ女性一人で見知らぬ男性の運転するタクシーに乗ることに抵抗があって、家族が交替で「アッシー」をしているところが多い。

それでも社会全体が近代化に邁進しているイラクでは、特に都会の若者の間に「宗教的伝統に拘泥している」ことを恥とする風潮が見られる。政府が一貫して世俗化を謳い続け「宗教への固執」を危険視してきたことが、そうした風潮を作り上げているのかもしれない。真っ黒な服装に身を固め化粧もしていない女性が、わざわざ「私が黒を着ているのは宗教上の問題ではない、この間身内が戦死したから喪服なのよ」とことわったのも、そうした風潮からくる意識なのだろう。

黒に身を包みながら、そのアバヤに金銀の華やかな刺繍をいれたりしているのを見ると、「おしゃれ」と「伝統」の折衷に涙ぐましい努力を感じる。同じアバヤ姿でも、サウジなどでは顔まで隠しているのに比べると、圧倒的に露出度は大きい。

## おしゃれ娘の社会進出

こうした「派手な西欧風ファッション」の好きなバグダード娘も、一九八〇年代半ば以降物資が不足するようになってからは、そうした既製服が手に入りにくくなって苦労していた。国内製の質の悪い服はなんとか買える値段だが、外国製の最新ファッションはとても手がでない。いきおい母親の古いミシンをひっぱりだして、裁縫を始める女性が増えた。日常的に普段着を裁縫するのはもちろん、年二回のイード（ラマダン明け大祭と犠牲祭）にはどんな貧しい家でも子供たちに服を新調するのが慣習なので、

祭りの前には母は大忙しだ。

ところで、彼女たちの頼みの綱は、ヨーロッパで発行されていてアラビア語版もある『ブルダ』というファッション雑誌である。この雑誌の長所は型紙がついていることだが、残念ながら最近はなかなか輸入されない。何カ月も前に発行された『ブルダ』を隣近所、親戚一同で回し読みをして、それぞれ自分で服を作る。海外に知合いが行く、といったまれな機会があれば、女性たちの「お土産」のリクエストの中には必ず『ブルダ』が入っている。器用な女性になると、型紙もない普通のファッション雑誌を見ただけでそっくりの服を作り上げてしまうこともある。

ちょうど外国からの輸入が激減して物資不足が深刻となった頃、政府は国内輸入代替産業の活性化と称して民間企業設立の条件を大幅に緩和した。その中で個人経営の商店などが増加していったが、裁縫に自信のある女性たちが自力でブティックを開く姿も見られた。

普段着の一家。このディスダーシャの上にアバヤを羽織って外出する。

『ブルダ』を基に、隣近所、親戚一同からの裁縫の注文を一手に引き受けて小銭を稼いでいた女性たちが、「オーダーメイド承ります」式のブティックを始めたのである。

役所に勤めていた友人が、戦死した夫の遺族手当を資金に小さな店を持って言うには、「役所のお給料よりよっぽど儲かるのよね」。一九八七年当時、店の賃貸料が一〇〇ディナール（公定で三二一ドル）だったのに対して、簡単なブラウス一枚の仕立料が一〇ディナールだったから、結構な商売だったのだろう。当時の彼女たちのこうした意気込みはなかなか逞しいものであった。

しかし、その後、湾岸戦争で物資不足が本格的になってからは、こうした商売も順調とはいえないようだ。政府は国民に「服など新調せずに我慢せよ」と耐乏生活を強要し、また材料の布地自体も入手しにくくなっている。生活物資一般はヨルダンからの民間交易に依存するしかなく、給料の大半が食料に消えてしまっているような現状では、とうてい衣服まで気がまわらない。イードに服を新調するのが唯一の「ぜいたく」だった国民にとっては、なんとも悲しい祭りをもう二年も経験したことになる。

## 身内意識と室内着

ところで、こうした外出着とは別に、イラクでは男女ともに室内着としてディスダーシャと呼ばれるネグリジェを愛用している。貫頭衣に簡単な袖をつけたものとでもいうべきもので、就寝用だけでなく室内で家族でくつろぐ時に重宝する。日本でいえば、浴衣感覚だ。ちょっと外に出かける時には、女性ならばその上から「ぼろ隠し」でアバヤを羽織ってしまえばよい。いや、ちょっとお隣さん、あるいは路地裏の家に「お塩を借り

華やかな外出着のクルドの子供たち

に」程度であれば、ディスダーシャのままふらりと現れる。大きな通りを渡って、よそさまの眼に触れながら行かなければいけないところにはアバヤを着るか、着替えをする。

ディスダーシャのままふらりと訪ねる範囲が、彼らの（特に女性たちの）「身内」意識の領界なのだろう。筆者が知人の家を訪ねた時も、ディスダーシャのまま顔を見せるなり、すぐひっこんで正装に着替えてくる家と、ディスダーシャのまま家に上げてくれる家とがあった。徹底的な「イエ」社会、血縁・地縁関係があらゆる人間関係の基礎となっているイラク社会では、同じ知合い、親族でも家人のディスダーシャ姿のところにふらりと訪れることができるかできないか、で、身内意識が微妙に違っているようで、面白い。

**アバヤの功罪**　しかし、この「ぼろ隠し」としての「アバヤ」の効用は、なんと偉大なことだろう！　ちょっと外に出るのにも「外

出着」に着替えなければならない日本の日常に比較すると、よっぽど効率的に思える。もちろん、街を歩いていて余計な虚栄心や劣等感に煽られることもない。アラブ世界を席捲しているいわゆる「イスラム復興現象」とは別にしても、「アバヤでちょっと外出」は、女性が楽に街を歩けるスタイルでもあるわけだ。アラブ世界でよく言われる「邪視」——見られることによって危害を被る、という発想は、ここでも根強い。

無論、アバヤを脱いで、女性どうしで室内で雑談している時など、「これは結婚した時の主人のプレゼントなの」とか、「父がイギリスに行った時に買ってきてもらったのよ」と、時ならぬファッション・ショーが展開されることは、ままある。女性の自己顕示欲は、男性の視線の前でよりも女性の間で専ら発揮される、ということか。

最後に、蛇足ではあるが、アバヤには別の効用もある。一九五八年王政打倒クーデターの時に、悪名高き当時の首相ヌーリッサイードが、革命軍の追手を逃れて逃亡を企てた。明け方、クーデターの報に接した彼は、パジャマのままベッドから抜け出し、その上にアバヤを羽織って、女装して国外逃亡を試みた。しかし悪運もここに尽きたり。街中をアバヤで歩く彼の姿を見て、ひとりの少年が大声で叫んだ。「あっ、ヌーリッサイードだ！」アバヤの裾から男物のパジャマがのぞいているのが、周囲の不審を呼んだのである。

群衆に取り囲まれて真の姿を暴かれたヌーリッサイードは、結局、革命軍兵士によって殺害された。さらには、混乱収拾のために革命軍が遺体を収容して埋葬してからもなお、怒りのおさま

らない人々の手で、墓は暴かれ遺体はひきずりだされ、車の後ろにつながれて市内中の晒し者にされたあげく、遺体はエジプト大使館前で焼き捨てられる、という悲惨な最後を迎えることとなる。

アバヤの隠すものが庶民の虚栄心や嫉妬心なら、まだよい。政治家の巨悪を隠しおおせるものではないのだ、という歴史の教訓だろうか。

〔参考文献〕

(1) al-Khayyat, Sana, *Honour & Shame: Women in Modern Iraq*. London, al-Saqi Books, 1990.

(2) Fernea, Elizabeth Warnock, *Guests of Sheik: The Ethnography of an Iraqi Village*, New York, Anchor Book, 1965.

(3) Khadduri, Majid, *Republican Iraq*, London, Oxford University Press, 1969.

（さかい　けいこ／アジア経済研究所中東総合研究プロジェクト・チーム）